

日本語

我々はことばの教育というと、常に文字を優先して考えている。しかし、世界中のあらゆることばは元來、文字というものを持っていなかった。はじめに音声ありきだったのである。言語教育というものも、まず音声のほうに注目したい。

あよつといひ話

城生 佰太郎

話

言

語

学

創拓社

院图书馆
章

日本語

ちよつといい話

我々はことばの教育という、常に文字を優先して考えている。しかし、世界中のあらゆることは言葉、文字というものを持っていなかった。はじめに音声ありきだったのである。言語教育というものを、まず音声のほうに注目したい。

話
し
こ
と
ば
の
言
語
学

城生 佰太郎

創拓社

城生佰太郎 じょうお・はくたろう

一九四六年、東京都生まれ。一九七一年、東京外国語大学大学院（アジア第一言語学専攻）修了。東京学芸大学専任講師を経て、現在、筑波大学文芸・言語学系助教授。専攻は言語学、音声学。言語学の科学性を追求するとともに、学問としての言語学をひろく一般にわかりやすく伝えることをモットーに多方面で活躍している。

主な著書に、

『当節おもしろ言語学』（講談社）

『オタミミ・ペンペの言語学』（日本評論社）

『日本人の日本語知らず』（アルク）

『言語学は科学である』（情報センター出版局）

『新装増訂版音声学』（アポロン）

『ビデオ音声学』（アポロン）

『実験音声学（上）（中）（下）』（アポロン）などがある。

© Hakutarō Jōo

日本語ちよつといい話

話しことばの言語学

一九九一年七月二十五日 第一刷発行

著者 城生佰太郎

発行者 井吹 晋

発行所 株式会社 創拓社

東京都千代田区神田神保町二一三八

稲岡九段ビル六階 〒一〇一

TEL 〇三・三二八八・七一〇〇

FAX 〇三・三二八八・七一六四

振替 東京七―五八五五〇

装丁 戸田ツトム十岡 孝治

印刷 三松堂印刷 株式会社

製本 大日本製本株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

万一、落丁・乱丁の場合はお取り替えます。

ISBN 4-87138-135-8 C0095

1991, printed in Japan

創拓社からのおすすめで、私がいままでFM放送やテレビなどで喋った内容を、一冊にまとめてはどうかという。たいへんありがたいお話だと思い、不覚にも、私はふたつ返事でお引き受けをしてしまった。ところが、いざ作業に取りかかってみると、これは予想外にたいへんな仕事となってしまった。というのも、音声言語を文字化しなければならなかったからである。

音声学を専門としてきた私は、これまでに数えきれないほど、音声言語と文字言語のちがいを説いてきた。この二つが、非常に異なる別個の体系を持っているのだと説いてきた。それにもかかわらず、その二つのちがいを肌で感じ取ってはいなかったのだということを、イヤというほど思い知らされたのである。

いろいろと思い悩んだすえに、結局は、話しことばのスタイルをあきらめ、書きことばの文体で全編を統一することに落ち着いてしまった。

そういうわけで、本書には、以前に私が何冊かの単行本で述べたテーマも、重複して収められているところがある。しかし、それは放送というメディアに照らして、多かれ少なかれ、その時々のお話や人々の関心を反映しているためであり、また同時に、私自身の強く興味を覚えた問題を、反映しているが故である。

また、この度の企画における私たちの願いは、普段、ことばに関心がない方々にも、気軽に読み流しをして頂けるように、そして、そうすることによって、一人でも多くの皆様にことばのおもしろさを知って頂けるように、といったところにある。どうか、私たちの願いが皆様方に伝わるようにと、衷心より願ってやまない。

日本語ちよとい話

.....話しこまの言語学.....

目次

はしがき



はじめに音声ありき

話しことはこそ教養の程度を示すバロミターである

ダジャレの効能

「このイクラ、幾ら？」——ダジャレがたくさんできる日本語の秘密

聞き間違いの論理

どんなに注意していても避けられない誤解を防ぐには

騒音大国ニッポンを憂える

騒音の垂れ流しを防ぎ、音環境をデザインする

上品な話し方とは

演説をしている本人が興奮して早口でしゃべるのは具合が悪い

城生佰太郎の話しことば講座① 音声学入門

話術以前の〈声術〉をマスターしよう

27

城生佰太郎の話しことば講座② イントネーション入門
尻上がりのイントネーションには相手に対する思いやりが込められている

37

城生佰太郎の話しことば講座③ アクセント入門

標準的なアクセントを身につけるとセールスもうまくいく

47

城生佰太郎の話しことば講座④ ポーズ入門

間を取り過ぎると〈間抜け〉になるが、効果的な間をおくことが大切

59

日本語の声域

欧米人よりも日本人のほうが一般的に幅広い声域を用いている

68

木を配る——音声の教育を考える

文字教育が中心だが、ことばの教育はまず音声から

74

「那須高原牛乳」のアクセント

那須〈高原牛乳〉か〈那須高原〉牛乳かでアクセントが違う

78

強弱アクセントと高低アクセントの違いはどこにある

英語と日本語のアクセントの違いを音響音声学的に考える

83

五七五は日本語本来のリズムか

〈赤信号みんなで渡れば怖くない〉は六八五だが、調子が良いのはなぜか

92

日本語ロックはノリが悪い？

日本人がリズム音痴なんだと考える必要はさらさらないが……

96

百人一首を当時の音で読む

〈ハヒフヘホ〉は〈バビフベボ〉だったというが、なぜ昔の音がわかるのか

朝鮮語で万葉集を読む

読み物としてなら面白いテーマだが、学問的に考えてみると

104

日本語の母音は五つか

一言で結論を言えは、〈然り〉であり、かつ〈否〉でもある

107

母音交替——日本語にも男性形・女性形があった？

〈こ〉は男性形を表し、〈め〉は女性形を表す

121

幼児のことばの発達

ことばの発達は子どもにかけた愛情のあかし

126

十七人のスティーヴンソン

スティーヴンソンからスティーブンスンからスティーブンスンか、それとも……

129

ティラミスでもなくチラミスでもなく、それはティラミス

一九九〇年代における「二」という外来語の表記法

135

丸文字の功罪

丸文字は書く楽しさ、見る楽しさを伝えることができる

140

語彙分析の方法

ライストコはんの違いはどこにある

143

モゴル語の辞書

なじみの薄い言語の辞書作りのむずかしさ

149

ところ変われば品変わる

そこは林だった——〈ウィーンの森〉に出かけてみると

153

学術用語の不思議

原語は同じでも学問領域によって訳語が違う

158

オノマトへの言語学

日本人はオノマトベがお好き

161

ネーミングの言語学

音そのものにも意味があり、音声重視の独創的ネーミングが大切

173

すたれるE電

〈E電〉という名称が受け入れられない理由

182

ヒネ——ことばのバイオテクノロジー

ことばの世界でも細胞融合のような変化が日々起こっている

187

ブッソ流言語

〈ブッソ〉ということばがこの先ずっと生き延びていくであろう理由

190

理屈に合わない表現

〈負け嫌いでいいのに、なぜ負けず嫌い〉と言うのか

筆なんか入っていないのに筆箱とは

靴しか入っていないのに下駄箱と言うが如し

緑の葉がなぜ「青々としている」のか

信号は青なのか緑なのか——日本語の色彩語彙について考える

女ことばは消滅する？

日本語の長い歴史から見れば、男女のことばの違いはごく最近のこと

二十一世紀の日本語はどうなるか

日本語も国際語としてより洗練され単純化される方向で変身を選げつつある

映画と言語学①「インディー・ジョーンズ」

「ことばが時代とともに変化する」ように映画もまた変わっていく

映画と言語学②「駅馬車」

現代社会が忘れかけている、とつてもとつても大切なこと

数学と言語学の接点

学問に垣根はない——究めれば究めるほど他の分野との接点が増す



あとがき

↑日本語ちょっといい話……………話しこんは言語学……………↓

……はじめに音声ありき

——話しことばは教養のバロミター——

昭和六十二年度から、自治省主体の外国青年招致事業というのがスタートして、いままで大学でしか教えてもらうことができなかった外国人の先生が、小学校や中学校、高等学校に配属されるようになった。

さて、全国津々浦々に若い外国人教師が配属されて、英語の勉強がはじまった。そこでこの外国人教師が最初に戸惑ったのは何であるかという点、どうしてこんなに会話を軽視しているのだろう、英語の勉強というと文法ばかりやっている、これはおかしいのではないか、ということだった。

例えば、フランスから来日したジル・ルセロさんという人が、英語を教えるために新潟県に赴任した。最初の時間にこの先生は何をやったかという点、黒板に一字も文字を書か

なかった。ひたすら、しゃべって、しゃべって、それを生徒たちに真似をさせるという方法をとったのだ。最初は生徒たちも、何かと戸惑っていたのだが、その先生のやり方にだんだん慣れていって、一時間があつという間に過ぎてしまう。英語の時間が楽しくてしょうがないという感想をもらすようになった。つまり、教え方として、日本人の先生は常に黒板を使って、文字としてことばを教えようとする。それを、外国人の先生はまったく文字を使わないで、音だけで教育をしようとする。この違いが歴然と出ていたと言えよう。話しことばというと、意外に誤解が多いのは、文字化されたものを声に出して読みさえすればそれでよいと思っている人たちが多いということだ。文字化されたものを声に出すことは、音読という。つまり、話しことばというのは、単なる文字ことばの音読とは別にあるものだということになる。

我々が、音読と話しことばの違いに容易に気づく例に、演説がある。日本では、テレビや映画などで報道される偉い人の演説というものが、下ばかり向いてはいないだろうか。あれはいったいどうしてかというところ、演説ではなくて原稿読みをしているからなのだ。それに対して、欧米の人たちというのは、視線がぼつちりカメラのほうを向いていて、いつも視聴者を見て演説をする。彼らは最初から、メモは持っていないでも完全原稿などというものは用意していない。その場のアドリブで演説をするということを身につけているからだ。

つまり、そういう教育をしつかり受けているからこそ、話しことばを自由に操ることができるといふ何よりの証拠だと言えよう。

ところで、私たちが受けてきた国語教育では、少なくとも話しことばを専門家から体系的に教えられたなどという経験は皆無に等しい。ここに欧米の母国語教育とは大きな断層が見られるのである。したがって、これから国際社会を生き抜いていくためには、やはり私たちも、欧米並みに話しことばというものを、もつともつと身につけていかなければいけないのではないだろうか。

あの『マイ・フェアレディ』という作品に象徴されるように、欧米では文字言語よりも音声言語をいかにうまく操れるかということが、教養を示すバロミターになっている。わが国も一日も早く、そういうレベルに到達するよう、私は心から願ってやまない。

方言こそ言語学の宝庫

閑話休題。日本語の方言には、その方言でなければ表現できないものが多い。共通語・標準語にムリヤリ言い換えたとしても、方言の持っているニュアンスがどうしてもうまく伝わらない。

「出世魚」ということばがある。方言の問題と出世魚とは、まったく関係がないように思えるが、ニュアンスの問題としてとらえると面白いことがわかる。例えば、「せいご」は「ふっこ」となり、「すずき」となる。「わかし」は「いなだ」から「わらさ」になり、最後に「ぶり」になる。このように呼び名が変わることは、外国語では非常に珍しく、翻訳しようと思うと、「体長が何センチぐらいまでのスズキである」とか、「体長が何センチぐらい以上のスズキである」などと説明的に言わなければならぬ。やはり日本人が海というものに対して多大な関心を払っているということの現れなのである。

似たようなことが、例えばモンゴル人民共和国の家畜の語彙にもある。「羊」ということばを例にあげてみよう。日本語では、羊は一歳でも二歳でも三歳でも、当然のことながらみなヒツジと言う。ところがモンゴル語では、一歳のヒツジのことをホルガと言う。二歳になるとシュドウレンと、まったく違うことばで呼ばれる。三歳の羊はハヤザランと言う。四歳になるとソヨーロンと言う。さらに羊一般はホニと言う。これは何を示しているかという、やはり生業として家畜を大切にしているモンゴル人民共和国では、家畜に対して異常なほどまでに社会的な重要性というのを認めているということなのである。そして、その重要性が語彙の世界にも反映されているのである。

このように、方言の語彙というのは、その地方地方の文化の一種の現れであり、縮図で

もあるという一面がある。すなわち、東京のことばだけが、いつも方言に対して優れているとは言えないことになる。アクセントを例に考えてみよう。みかんの皮をむきながら食べるという場合と、流れている川のほうを向いて食べるという場合を、東京のアクセントで言くと、

カワヲムイテタベル（皮をむいて食べる）

カワヲムイテタベル（川を向いて食べる）

と、傍線部分が高く発音されるので、両方とも同じになってしまう。まったく区別がないのである。ところが京阪式のアクセントで言くと、流れる川だけが「カ」を高く発音するために、

カワヲムイテタベル（皮を……）

カワヲムイテタベル（川を……）

と、ちゃんと違いがある。つまり、この場合、東京式よりも京阪式のアクセントのほうが、